

王引之の考拠

——『經義述聞』卷五における「歌以詛止」の考拠から——

一

『詩經』陳風「墓門」第二章に「墓門有梅、有鵲萃止。夫也不良、歌以詛之。詛予不顧、顛倒思予」とある。第四句の「之」が「止」であることは通説である。「詛」⁽¹⁾「sun」に関しては、第二句の「萃」⁽²⁾「pewi」と押韻するはずであるが、このままでは韻が合わないの、字形の類似した「詛」⁽³⁾「pewis」の伝写の誤りとする見解が出た。戴震に代表される形譌説である。王引之『經義述聞』は王念孫の説を承けてこれを否定し、「詛」の『詩經』時代の発音は「詛」と同音で、相互に通用したとする。以後この二説が紛糾して今日まで定説を見るに至っていない。⁽⁴⁾

ところが、一九七七年安徽省における阜陽双古堆一号漢墓——文帝の一年(B.C. 165)に卒した夏侯竈の墓——から出土した木簡類のなかに『詩經』(阜詩)があった。それは、一四三の碎片で、国風の六四篇と小雅の一部を含み、現行『毛詩』にたいして約百字ほどの異文がある。⁽⁵⁾この中に今問題としている部分の残簡——編号 S128——があり、隸書で「梓止夫也不良歌以詛」と判読できることから、形譌説が決定的であるとする主張が現れた。すなわち、胡平生・韓自強「阜陽漢簡《詩經》簡論」⁽⁶⁾は、テキストの系統を確定するために異文を詳

濱 口 富士雄

細に分析し、異文の内容を四類に分けた。そしてその第四「今本『毛詩』あるいは『阜詩』の誤字が生み出した異文」において、残簡に「詛」とあることから、現行『毛詩』の「詛」は、誤字であることを論じた。ただ「詛」一字だけを特に『毛詩』の誤字と断定する点は、問題に思われる。さらに胡平生「阜陽漢簡《詩經》異文初探」⁽⁷⁾では、この見解を次のように補完する。

詛、毛詩は「詛」に作る。毛詩『釈文』は「詛、また詛に作る」と。王先謙は、魯・韓詩の「詛」もまた「詛」に作る、という。思うに、『広韻』六至は「詩」を「歌以詛止」と引用し、錢大昕・段玉裁・朱駿声らは「詛」は「詛」の誤りと見ており、林義光もまた草書の「卒」は「卒」に作り、「汎」と形が近いので、「詛」を「詛」に誤写したというが、その説は正当である。……文献中「詛」「詛」の互いに誤記される例は非常に多く、『辞通』に「詛字、古また読んで詛と為す。故に二字通用す」(王念孫『広雅疏証』の説を採る)というのは、正しくない。

この議論には、阜詩が「詛」に作る事実を、無条件で評価する予断をもって「詛」の形譌に言及している観がある。阜詩は、後世の手の加わった可能性がない、本文批判において最も尊重すべき antedat-

ingsであるが、それにしても、にわかに「訊」を排除して王念孫による通用説を否定するのはいささか性急ではないか。なぜなら、この阜詩のテキストとしての系統について、『毛詩』と文字の異同がはだ多すぎることから、自らも「決して『毛詩』の系統ではないと断定できる」といい、さらに三家詩にも属さないテキストであると説くからである。たとえばS18の残簡で「萃」を「粹」に作る例も、同一諧声系列の異構と理解できるが、従来の記録にない初出の異文である。このように『毛詩』でないことが決定的であるのみならず、その系統も明確に規定できない状況のもとで、「訊」を積極的に排除する条件はないように思われる。楚に属す地域から出土した阜詩における「粹」は、漢代初期、少なくとも紀元前一六五年以前の『詩経』テキストの一つでは確かに「粹」と書記されていた情報とはなるが、この阜詩が紛れもなく『毛詩』系統に属すばあいならばともかく、それ自体の系統を確認することも困難であるほどの多大な異文のままで、訊を諄の誤字とする主張には説得性が感じられないのである。すなわち、馬王堆漢墓出土の『老子』甲・乙本を初めとする出土文献の異本や異文の実態、歴史的には前漢末の劉向・劉歆父子の校書時における膨大な異本の存在、また経書の石経などによる標準化は時代がずっと下って後漢であった事実などを視野におさめて見れば、書記形式が混沌たる時代の出土文献の異文をそのまま規範的な立場から利用することは妥当な扱いとはいえないであろう。殊にいくつかの異系統のテキストが存在するばあいは、その系統を確認する作業が基礎となつて、それから初めて異文の、仮借字・同源字・古今字・異読・誤写といった分析が可能となるはずであるからである。

こうした出土文献に基づく本文批判が行われる状況を見据えつつ、「墓門」の訊字の考拠の周辺を明かにし、清代考拠字の典型とされる王引之の文献にたいする認識やそれと相即不離のかたちで展開した考拠の内実を検討してゆく。

二

まず、王引之の考拠を検討する前段階として、諄／訊がいかに理解されていたかを確認しておく。

この問題は、清朝においては顧炎武『詩本音』⁽⁷⁾に淵源する。まず現行『毛詩』が「訊」に作る点を、『釈文』、『広韻』と『楚辞章句』との引用、押韻などを根拠として「明かに諄字の誤りである」と断定する。これは文脈上、「告」義を一般義とする「諄」とすることが表記のうえでは規範的であるとの判断に立つからである。ところが奇妙なことに、これを承けてすぐに「皇矣」や『礼記』学記で、本来「問」義の「訊」を用いるべきものが、「諄」であることにたいして「古人は二字を通じて（古人以二字通用）」と通用説を立てて、さらにいくつかの証例を挙げる。顧炎武の考証は、表面上は形譌説と通用説とを併記しており、後の考拠が分岐する原因となつたごとくに見受けられる。しかし、顧炎武の考拠を検討するに、両説を同じ条件で併記したものとは考えられない。つまり古代の文献の諄／訊の書記実態を記述的に見たばあいは、相互に通用していたことを前提としたうえで、「墓門」の「訊」は、文脈上「告」義であるべきことから、「諄」とすべきことを規範的な立場から指摘したものと理解することが、かれの真意に沿うように思われる。

次に形譌説の典型として王引之が批判の直接的な対象としたのは戴震『毛鄭詩考正』の論である。『東原文集』「論韻書中字義答秦尚書蕙田」にも同趣旨の考拠があり、ここでは「字形も音も異なり、全く通用しないが、伝写して誤り、紛れて区別しえない（異字異音、絶不相通、而伝写致譌、混淆莫弁）」例として「慄・慘」「搏・搏」などともに類型化していることから、戴震が形譌を強く意識していたことが分かる。戴震は、「墓門」の文脈に適う「告」義の「諄」は「碎」音で、「萃」と押韻するが、「訊」は「信」音で、しかも「問」義であるから、

「詩義・音韻いずれも不都合である（於詩義及音韻咸扞格矣）」として、「訊」は「諄」の写本作成上の形譌と断定した。その根拠として「離騷」王逸注引用の「墓門」が「諄予不顧」、「後漢書」張衡伝の「思玄賦」注引用の「爾雅」が「諄、告也」（現行本は「訊、告也」）であることを挙げ、本来「告」義は諄字で書記されるべきことを確認する。しかも六朝陳に成立した陸徳明『經典釋文』には「あるテキストには諄とも作る。シンと発音する。徐邈はスイとする（本文又作諄。音信。徐息悻反）」とあることから、当時すでにこの二字に混同があったと指摘する。

錢大昕も「陸氏釈文諄不弁」⁽⁹⁾で、「諄は告と訓み、訊は問と訓み、両字は形体も音もと異なるので、通用しう道理はない。六朝人は草書になれて、卒を孕とすることが多く、かくて刊と似ることになつてしまい、陸徳明も区別し訂せなくなつたのである」と、その形譌の理由を六朝時代における草書体による字形の混同に求めたうえで、訊は、本来諄であるべきことを断じる。

段玉裁は、『詩經小学』⁽⁹⁾で「広韻」六至の引用が「歌以諄止」となつてゐることを踏まえて、「諄・訊は意味が別れるが、諄は訊に書き誤られることが多い」と論じ、「訊」が誤りであることをいう。一方、『六書音均表』「詩經韵分十七部表」の第十五部に「墓門」二章の韻字を「萃・諄」として、「訊」字を改めた理由を「諄、現行本は誤つて訊に作る。王逸楚詞注引用の詩『諄予不顧』、広韻六至の引用は『歌以諄止』であるのに拠つて改正する」という。しかし問題は、段玉裁が「訊」を形譌と認定するに当たつての経緯である。実は『六書音均表』の先行本である『詩經韵譜』では、「訊」を形譌とせず、そのまま「萃」と押韻する「古合韵」と認定してゐたようである。それは、錢大昕の段玉裁への書簡⁽¹⁰⁾に明かである。錢大昕は、古代にあつて音声の通仮があつたことを否定はしないが、それは限定されたもので「方言とか声転とかに由来し、結局いずれもその変化の軌跡を辿れるのであつて、すべてが思ひのままに通じうるわけではない（要皆有脈絡可尋、非全部任意

可通）」と表明し、「方言」や声紐間の「声転」という一定の条件の範囲においての転移は認めるが、「古合韵」という異韻部間での組織的な転音は認めない。そして段玉裁が、大雅「縣」の「臚」を「牒」に、また「墓門」の「訊」を「諄」に改めない二例を特に取り挙げ、これらは「字形が似ており、必ず転写の誤りである。しかしながらあなたは遍く経書を記述的に調査し（攷古）て经文の誤りを訂正したが、一方では誤り伝えられた字音を残して、通転の例としている」と批判した。これから推測するに、段玉裁は、この批判を承けて「訊」に関しては受け入れたが、「臚」に関しては自説を固持し、それが『六書音均表』に「古合韵」として残るのである。すなわち「詩經韵分十七部表」の第一部で「古合韵」に位置づけ「臚」本音は第五部。小旻では謀と押韻し、縣では飴・謀・龜・時・茲と押韻するのは、古合韵である。韓詩の小旻が民雖靡腓で、縣が周原腓腓であるのは、本韵を用い、合韵ではない」という。しかし問題は、錢大昕の批判に耐えられるほど、段玉裁の十七分部説の一部と五部とは音理的に近くもないのかかわらず、『毛詩』テキストで押韻とされてきた現実を重視して「古合韵」の概念で合理化したが、この限りでは、訊の属す十二部と諄の属す十五部との間でも事情は本質的には変わらないからである。『六書音均表』の詩韻から見ると、一―五部間の合韻は、臚・牒以外にも、第五部で三例を認めており、十二―十五部間の合韻は、第十二部で二例、第十五部で三例を認めていて、この両者の取捨を決定づける差はないようである。では段玉裁はなぜ「訊」だけを引っ込めたのか。ただ十二―十五部の合韻の五例をよく検討してみると、この五例はいずれも入声どうしの合韻であるのにならして、「訊」のばあいは異なるという点で段玉裁の取り消しの意向が働いたのであるか。それにしても段玉裁が一時は合韻と見た「訊」のみを形譌説に切り替えた根拠は稀薄である。『六書音均表』で、この問題はすっかり沈黙してしまつて形譌説に落ち着いているが、字形だけで処理しうるほど問題は単純ではないことが窺われるのである。

三

王念孫は『広雅疏証』で「訊字は、古代では諄のように読み理解したので、経書や伝注では一般に二字を通じ用いた。訊を諄の形譌とするのは誤りである（訊字古読若諄、故経伝多以二字通用。或以訊為諄之訛、失之）」¹²⁷と、古音における字音の近似性を、漢儒の用いた「読若」で端的に指摘して通用説を提示し、形譌説を誤りと断定した。王念孫はこれ以上詳しい議論をしないが、王引之は『経義述聞』¹²⁸でこの見解を承けて詳細に分析する。

王引之は、批判すべき形譌説として、戴震『毛鄭詩考正』の説を提示したうえで、初めに結論を示し「訊は、誤字ではない。訊は、古代はまた諄のように読み理解した」という。この結論にたいする論証として、第一に「墓門」以外での押韻例を挙げる。『詩経』「雨無正」・張衡「思立賦」・左思「魏都賦」で、訊が脂部に属す韻字と押韻することを確認し、「墓門」でも訊が脂部の諄と押韻して「古音においては必ず韻が響き合った（於古音未嘗不協）」と断定する。ここで注目されることは、戴震が証例とした『後漢書』所載の「思立賦」ではなく、敢えて『文選』所載のそれをもって押韻例とした王引之の見識である。『後漢書』では「占水火而妄諄」に作り、唐の李賢注引用の『爾雅』は「諄、告也」とあるのにたいして、『文選』は「占水火而妄訊」に作り、李善注以前の旧注は「訊、告也」、李善は「訊、息对切」と音注しており、諄／訊の異文関係を提示する。『文選』は通説としてその表記の保存性のよさがいわれ、¹²⁹ここでは「訊」が内・対との押韻字としてある。これは梁代の音韻からすれば押韻と認識することは難しかったはずであるが、編者の昭明太子蕭統は全体的に当時の音韻規範によって調整することはしなかったのである。さらに王引之は異文の字音に目を向け、『礼記』学記鄭玄注の、「訊」の異文に「誓」がある、という指摘に注目し、訊・諄同音の証左と見做して、「訊・諄は同声なので、二字は相

互に通じる（訊諄同声、故二字互通）」と通用説を確認する。

次いで、戴震の考拠が、諄・訊は意味の方面でも交渉がないと指摘することへの反駁として、王引之は、多くの文献上、訊（問）と諄（告）とが意味的に交差する例を検討する。しかしその大部分は諄／訊の異文関係を伴い、形譌説の立場に立てば、相互に伝写し誤った事例とも見做しうるものである。しかるに王引之はその頻度の高さををもって記述的な視点から「意味が諄告でも通じて訊を用いたり、意味が訊問でも通じて諄を用いたりする」と、古文獻での実態は訊と諄とが相互に完全に通用しあっていたと判断した。その補足的な論証として、後出の文字ではあるが、諄と同音の「諄」に、『広韻』は告・問二義を登録しており、『集韻』には「諄、あるいは訊に作り、通じて諄に作る」とあることを指摘し「諄・諄・訊同声なるが故に同じく問と訓じるのである」という。また諄と同音の「駁」について、『説文』に「楚人は吉凶を卜問することを駁という」とあることから、「駁に問義があれば、諄に問義があることである（駁之為問、猶諄之為問矣）」と、訓詁学上のテクニクである「因声求義」を背景とした比例の方法を用いて指摘する。ただ王引之は同声同訓を強く前面に出すことはせず、消極的に意味上の関連を示唆する程度である。しかしこの点を踏まえて「ただ同声だけでも、それゆえに仮借するのである。形譌字と言いつつてしまうことができるか（惟其同声、是以仮借。又可尽謂之譌字乎）。毛鄭詩考正の説は粗雑である」と結論づける。この立言には、意味上の疎通が全くなくても、同音であるだけで仮借の条件としては十分であるから、まして意味的な交差が読み取れるばあい、これを形譌とすることは受け入れ難いとする、仮借にたいする的確な視点が背景となっている。王引之の仮借の内容を、この結論に即して整理すると、同音だけが仮借の条件となるのは、同音借用であり、意味的にも疎通するのは同源通用のばあいである。王引之の仮借はこの二つを含意しているのである。

ところで、この考拠において王引之は注目すべき見解を示した。そ

れは、戴震が形譌説を実証するために挙げた引用の証拠能力についての問い掛けである。ある文献あるいは注釈は、その中に意義を補足し、注解するために他文献を引用することがある。従来考証の実証性を支えるものとして重視されてきた、これらの古文獻・注釈の引用の本文批判上の価値を審問して、王引之は、古文獻で引用された字句は、常に引証に供されるという性格上、対象の字句に制約されるため、その原書本来のかたちを保存しているとは保証しえないと指摘するのである。

古人の引用は、すべてが原書のままの文字ではない。かりに引用される方の文献が彼字に作り、注釈する対象の文献が此字であるばあい、声・義が同じならば、注釈対象の文献に従って字を書く。

(古人引書不皆如其本字。苟所引之書作彼字、所注之書作此字、而声義同者、則写從所注之書)

すなわち古文獻の注釈における引用の意義を批判し、どのような事情や対象のための引用かを考慮せず、引用部分だけを切り離して一方的に引用されたテキストの本文批判上の証例とすることを問題とした。なぜなら注釈などにおける書記行為には、文字の同音・同義という条件が揃ったばあい、通用の可能な範囲で、注釈者は引用を注釈対象の文字に合せて書き換えることを優先させることがあるからである。つまり、古代の注釈者の文字、延いては文献にたいする対応は、今日のように引用テキストの原形を尊重する規範的な立場は取らず、当面の注釈対象を補足・説明することだけを目的とするから、異文の生産や改変は普遍的であったと見る。したがって、戴震は、自らが挙げた『楚辞』注や張衡「思玄賦」注に引用された『詩経』や『爾雅』の実証上の価値について、それぞれの注釈対象である本文の「諄」字に拘束された結果であった可能性をも想定したうえで検討しておくべきであった。そこで、その引用の本文批判上の価値は限定されたものと

なるにもかかわらず、引用をそのまま検証なしに用いて、引用テキストの原形と同じであると判断した戴震の考証を、王引之は粗雑であると規定することになったのである。¹⁰⁵⁾

ところで、王引之の仮借説とその引用についての見解に関連して、馬瑞辰に興味ある説がある。『毛詩伝箋通釈』巻首「毛詩古文多仮借考」¹⁰⁶⁾で、『毛詩』の用字には仮借が多いことを指摘し、このため詩を論じる者は必ず仮借に通じなければならないという。さらに注目すべき見解として「経書や伝注において詩を引用するばあいは、正字を用いることが多いので、それで『毛詩』の仮借を考証することができるのである」という。すなわち諸経書や伝注に引用された『毛詩』は、原書本来のかたちは期待できない。なぜなら引用者がすでに解釈を施したうえで、その解釈に適う正字に置換している可能性があるからである。したがって、それは『毛詩』の仮借の判定や解釈の参考にはなりうるが、テキストの本来のかたちを考証するうえでの根拠にはなりえない。

すなわち王引之の指摘したごとく引用には引用者による判断や解釈があらかじめ加えられていることが、ここでも示唆されたのである。ちなみに馬瑞辰は「歌以詠之」にたいして、毛・韓詩が詠に作るのは、諄の仮借であり、本字の諄を用いた齊・魯詩が必ずあつたはずであると解釈している。

王引之は、引用の持つ実証上の意義にたいする再検討という補助線を一本引くことにより、今まで引用それ自体の意義を深く分析することもなく、古注あるいは古文獻の引用という事実に漫然と持たれかかっていた実証のあり方に異議申し立てを果たした。そして他文献における引用あるいはそれに依存した実証性というものの限界を見定めると同時に、その新たな局面を切り拓いたのである。すなわち引用に現れる異文というのは、音韻・意義の近似という契機がなければ、別系統の異読か、無意識・不注意などによる書き誤りであるが、近似があれば、それは引用者の意識的な仮借の適用による文献間の合理化や調整であったり、差し当たって注釈や解釈の対象とした文献の字句

に引きずられた改変の可能性であったりすることが示された。すなわち引用には、対象との調和・融合を図るための改変という意識的な操作が孕まれるのである。このように引用というものは、すでにそれがある文献の中から抽出し引証されたという、そのこと自体に引用者の意思が働いているのであり、ある種の意識や操作に支配されていることが一般的である。しかも古文獻の引用の根柢には仮借を書記形式の中に当り前のごとく抱え込んでいた古代の表記現実があった。したがって、このことが理解されれば、検証なしに引用をもって証拠することはないのである。まさに経書を含めた古文獻における引用状況を検討したうえで、考拠を支えてきた引用にたいする実証性を問い、戴震の考拠を批判したのである。⁴⁷⁾

ところで、唐代の写本として我が国に伝わり、清儒が参照しえなかった原本『玉篇』（梁の顧野王）の言部に、幸い「詛」があり（詛は欠損）、「告」義の解説項は次のようである。ここには、王引之の引用にたいする認識が古文獻での書記現実を言い当てていたことを実感させるものがある。

「詛」息悸反。『周礼』用情詛之。鄭玄曰、詛、告也。『尔雅』亦云。郭璞曰、相問詛也。『毛詩』歌以詛之。伝曰、詛（告）也。⁴⁸⁾

「詛」にたいする解説であるから、『毛詩』も伝も「詛」であり、しかも筆勢の強い楷書によって、「詛」と銭大昕が指摘した字体である「詛」とが筆の運びで両用されているので、表面上は形譌説に与するような資料となっている。しかし問題は最初に引用された『周礼』で、現行『周礼』小司寇は「用情詛之」、鄭注も「詛、言也」、『經典釈文』には「音信」とあるだけで、異文を記録しない（阮元の『校勘記』にも記録はない）。それだけでなく従来この箇所は、「告」義ではなく「問」義で解釈されてきており、異説はない。にもかかわらず「告」義の解説の第一に置かれた。では『玉篇』引用の『周礼』は、陸徳明が『釈文』を著した

ときに参照しえなかった別系統のテキストの存在によるのか。それとも転写に伴う形譌により詛／詛が交替したのか。しかしいずれにしてもこれらは形式的な問題であり、その解釈がすっかり改められ、鄭注の内容まで全く書き換えられることは考えられない。つまりこうした事態は、詛／詛の字音・意味の近似による通用の意識が基部にあつて、字書として「詛」の「告」義を解説するときに、それが意識的に働き、注釈対象の「詛」に調整したことを推測させるものであり、王引之が鋭く洞察した引用というものの限界や実態が了解されるのである。

四

詛／詛の通用説を支えた理論は、王念孫の古音二十一分部であり、これは王引之も共有したものであつたが、それが、古音において詛／詛同音の認識にどのように反映されたかを以下考察する。

王念孫『詩経韻譜』⁴⁹⁾では、「墓門」二章の押韻字である「萃詛」は脂部（段の十七部）に属せられている。「萃」はそれが本来の分部であるが、「詛」は古音が「詛」と同音であるとの判断による措置である。しかしながら、かれの『詩経合韻譜』では「諄・脂」合韻として挙げられているようであり、これによれば「詛」を諄部（段の十三部）に属させていたことは明かである。⁵⁰⁾陽類諄部と陰類脂部とは、いわゆる陰陽対転の関係にあるから、音転することにおいて一応無理はなさそうである。⁵¹⁾しかし、王引之は、この点を音理的に説明することはなく、ただ端的に「詛字、古読若詛」あるいは「詛詛同声」と結論を掲げるだけである。しかし幸いなことに、王念孫に親しく学び、その古音理論を的確に応用した宋保が『諧声補逸』なる書物を残す。この中で宋保は、詛／詛の問題についてもかなり細かく言及しているので、間接的であることは免れないが、かれらの詛／詛についての見解を知る参考にできよう。なぜなら、この宋保『諧声補逸』は、『説文』の重文などを手掛かりとして「合音」の理論をより一層展開させ、王念孫の古音二十

一部説を基礎として古音の通仮を実証した書物であり、しかも王念孫は、これを読んだうえで、問題点や補足すべき点などについて自らの意見を詳しく示し、宋保がそれを丁寧に本文中に採用してまわっているところ、それだけでなく王引之も、この書物を読み「凡そ発明するところ、咸く二十一部と相合して能くその会通を觀る」と、宋保の合音にたいする考拠や分析が王念孫の古音二十一部の本質を正確に把握し、その原理と合致したものであるとまで評価しているからである。

宋保は、「合音」について、古代の韻文を今韻で読み、押韻しないものを強引に韻が叶っていると見做す後世の「叶韻」とは異なり、古音体系を認識したうえで、その音理に適った韻の通転を踏まえたものであると指摘する。そしてある部の字をもって別の部の音に諧和させる合音の原理は、六書の仮借・転注を支配しており、漢儒が記録した「某読んで某のごとし（某読若某）」「某読んで某と同じ（某読与某同）」の音注の中に、その合音の軌跡を説明する仕組みが備わっていることを指摘する。しかしそれは非常に微妙であるため、その分析には事実の欠如部分を強靱な論理的思考で補完する好学深思のあり方が要請されるとした。²⁸⁾

さらに、「合音」の原理を分析して、「同位」＝諄部のものが元部のものと音通するようないわゆる傍転と「異位」＝諄・元部のものが支部のものと同音通するようないわゆる対転・傍対転との二類に区分した（大抵合音之理、取諸同位如諄文入元寒、取諸異位如諄文元寒入支佳）。そして古音分部の構造、すなわち各韻部の遠近関係のもとで、音転や漢字の諧声系列も脈絡が通じさせられていることを指摘する。²⁹⁾ このような「合音」の認識にたいして、王念孫が深く同調していたことは次のことから明らかである。すなわち『説文』で会意文字とされる、支部に属す覲・覲・規などについて、これらを元部の「見」を声符とした諧声文字とする宋保の解釈を支持する。そして「覲・覲・規は、見を声符とするという見解は、正しい。支部と元部とが音転することは、経書や伝注の中に確かに根拠があるからである。しかしながらこれま

で音韻を論じた者で、この点に論及した者はいなかった」といい、自ら押韻・声符・字音・異文の多方面から証例を収集して「支・元相通ずるの証」を確認する緻密な考拠を提示した。すなわち、ある種の諧声文字は、それ自体の字音と声符とが別々の分部に属することがあり、この事実からその異部間の合音関係を確認することができるのである。このばあい、古音分部は『詩経』時代の音韻を反映するが、諧声系列はそれよりもさかのぼるものであるといった問題については論ぜず、字音と声符とが異部である現象をひたすら記述的に指摘する考古の立場に徹して、着実に古音体系における各韻部の音通を検証するのである。この例からも王念孫の合音にたいする認識の程度を推測することができよう。

では、具体的に宋保は、諄／諷について、どのように理解していたであろうか。

諷。古文は諷に作り、𠂔が声符である。諷は、諄と同音で、古音は脂部に属すが、𠂔は、古代では先と発音し、古音は諄部に属す。これはちょうど𠂔が𠂔の声符に従うのに、俗字は棲に作り、妻が声符であり、隼は、𠂔の省文が声符であるのに対応する。（諷。古文作諷、𠂔声。諷与諄同音、古在脂部、𠂔古説如先、古在諄部。猶𠂔从𠂔声、俗作棲、妻声、隼从𠂔省声也）

という。これは、古音における諄・脂兩部の通転の例を検討し、諄部に属す諷が、脂部の諄と同音でありえた可能性を明かにしたものである。まず、𠂔を声符とする諷が、諷の古文であることを有力な手掛かりとして𠂔（西の古文）は、古音が先（段玉裁も古音を諄に比定する）で諄部にもかかわらず、これを声符とする𠂔（𠂔は、脂部の妻を声符とする棲を俗字とする事実を指摘する。次に、これはやや問題を孕むが、隼の古音は脂部でありながら、諷と同じ諄部の𠂔の省文（十）を声符とすると判断する。詳細は「𠂔」の考拠の過程に示される。すなわち現

行『説文』の「隹」が、『六書故』引用の唐本『説文』では「𪔐、从鳥从隹。隹从佳从𠂔省」とあり、李陽冰が「隹、𠂔省声」というのに注目する。そして「隹」は、『詩経』で止・水と押韻し、『周礼』考工記では隹を声符とする「準」の異文として「水」があり、さらに『白虎通義』の「水の言為る準なり」、『説文』の「水は、準なり」の声訓による訓詁から、水・準は音義が近いと理解し、𠂔の省文を声符とする隹の古音を「水」と同じ脂部である推定したのである。

しかしながら、諄・脂両部に関してならば、段玉裁も、その近似性を大いに認めている。すなわち『六書音均表』『古十七部合用類分表』では、第十三・十四部と第十五部とを異平同入とし、さらに『詩経韻分十七部表』の第十五部の「古合韵」には「微韻(十五部||脂部)と文・欣二韻(十三部||諄部)とは転移関係が最も近い」という。問題は、王念孫・宋保らが「訊」を諄部に属させたのにたいして、段玉裁は第十二部(||真部)に属させていた差である。したがって、形譌説と通用説との分歧の根源には、「訊」が異なる分部に帰属された、古音分部の認識問題が潜むのである。

段玉裁が第十五部において十二部との合韻を認めるものは、先にも見たごとく、入声に関してであり、一度は認めた「訊」の合韻説を撤回した理由は、基本的には訊が入声ではなく、音転の一般性に外れると考えていたからであると思われる。すなわち、「第十二部第十三部第十四部分用説」で「第十二部の入声質・櫛韵、漢以後は多く第十五部の入声と合用するも、三百篇は分用画然たり」と、『詩経』時代における音韻の厳格な区分を指摘している。

また段玉裁は、鄭庠の六部説、顧炎武の十部説や江永の十三部説を検討し補完するかたちで、『詩経』の押韻などの分析を通して古音十七部を構想したが、『六書音均表』『今韵古分十七部表』からも明らかなくごとく『広韻』二〇六韻の枠組を引きずって、各韻の枠を崩すことなくそのまま十七部に再配置しているため、『広韻』二十一震に属する「訊」は、おのずから震韵の属す第十二部に帰属することになる。こ

れにたいして、王念孫の『広韻』の二十一分部への具体的な配置は、現在の資料からは明かにしえないが、『経義述聞』『古韻二十一部』の至部・祭部・侯部の諧声表から窺える限り、考古の立場に徹して『広韻』の枠組を崩して、それにこだわらずに諧声系列のきめ細かい配置を行っているようである。この辺の経緯は、王念孫が自らの古音分部の出版は意味をなさなくなったと絶賛した江有誥の二十二分部表からある程度示唆を得られよう。なぜなら、その分部および諧声系列の配分には非常に近いところがあり、王念孫は江有誥の『唐韻四声正』の内容に関して「私の見解とほとんど合致しており、ますます我を忘れて狂喜した」といい、しかも「もはや尊書と古音の理解がほぼ同じであるからには、私の著作は出版しなくも十分である」とまで自説の考え方や具体的な細部の近似をいうからである。事実、「訊」の配置に関して、江有誥もやはり文部(=王念孫の諄部)に配置した。では江有誥は真・文部の境界をいかに認定したのであるか。王念孫への書簡で「詳細に通用状況を分析するに、真部は耕部と通用すること多く、文部は元部と合用することやや広い。これが真部と文部との境界である」と規定した。すなわち、隣接の耕部あるいは元部のいずれに通用関係が強く傾斜するかをもつて真・文部を区別するのである。この基本認識のもとに、古文獻の押韻や諧声系列を分析し、やはり『広韻』二〇六韻の枠に拘らわれずに、それを微調整して、古音分部へ配置したのである。そして、段玉裁が第十二部(真部)に属させていた真・軫・震韻の三分の一を文部に移動させ、その結果「訊」は文部(諄部)属することになったのである。こうした操作が王念孫の訊の古音の認識においてもあつたことは想像に難くない。

以上、古音における枠組とそこに配分された細部についての相違を知ることができたが、こうした結果がもたらされた原因は、根本的には、『詩経』の押韻の認識に掛かっていた。まさに「清代学者の古韻研究の発展は、實際は『詩経』の押韻の認識史である」と評されるゆえんでもあつた。

王念孫は『詩経』の押韻に関していかなる見解を示したか。それは『経義述聞』巻七「古詩随处有韻」に明かである。『詩経』の本質は當時の発音による誦詠にあったことを確認して、次のようにいう。

後世の『詩経』を鑑賞する者は、その言葉を読むことは知つてゐるが、その音声を誦詠することを知らないために、詩の持つ音律を失うことになった。さらに時には古今があり、音には変遷があるので、現在の発音をもって古代の作品を読むと、押韻の句末にあるものでさえ、もはや認識できず、それ以外のばあいはいうまでもない。私は年来研究を重ね、古音はすでにその本質を了解したので、『詩経』三百篇を取り、日夕これを読んで、古代の人々の詩は、音律や音節ごとに、あらゆる箇所でも韻を踏み、後世の人の読み方では把握し切れない韻律を内在させていることが実感された。(余潛心有年、於古韻既得其要領、於是取三百篇日夕讀之、覺古人之詩、應律合節、觸處成韻、有非後人誦詠之所能盡者)

と、古音の本質を了解することによって初めて『詩経』の押韻に関して正しい認識が得られるというのである。しかし、逆にこの『詩経』や古代の韻文の脚韻のみならず、複雑な句中韻に関しての了解が、古音分部を正しく導く基礎資料ともなるのであり、相互に依存し補完しあう関係にあることから、古音についての認識が押韻分析についての深い自信に結び付いたわけである。『詩経』を読むばいには、古音についての了解のみならず、古代の韻律を深く体得しなければならぬことを指摘しているが、こうした立場から古代文献に即して押韻を分析したものが『古韻譜』であり、古音分部の基礎的作業となったものでもある。したがって王念孫は『古韻譜』に提示した押韻の認定についての自負にはただならぬものがあるのである。王念孫は、諄傍線を付す「脂合韻の押韻として」「北門」三章の敦・遺・摧、「碩人」一章の頤・衣・妻・姨・私、「采芣」四章の煒・雷・威、「杕杜」四章の偕・

近・邇などとともに「墓門」二章の萃・詠や「雨無正」四章の退・遂・瘁・詠・答・退を挙げる。こうした敦・頤・煒・雷・威などの本来-n韻尾を持つ諄部の陽類音が脂部の陰類音と確かに押韻した事例の存在を重視して詠を排除せず、その音は「諄」と同じであることを主張したのである。ところで北門・碩人・采芣・杕杜については、段玉裁も、第十五部(Ⅱ脂部)において本音が第十三部(Ⅱ諄部)の「古合韵」とする。つまり「詠」の認識が、段玉裁にあつては第十二部ではあつても、入声ではなかったことが起因して、形譌として排除することになったと考えられる。すなわち韻部の枠組の認識の相違が、音通形式を規定したことが改めて示されたわけで、それが古代の文献を認識する規範として機能し、現実の文献の認識を左右することになっていたのである。³⁰⁾

五

「歌以詠止」の詠を「告」義で解する王引之の経文解釈は、形譌説の解釈と同じである。したがって、たとえ形譌説に拠ったとしても、文脈に適合することには変わりなく、詠／諄に関しても整合的に説明しうるようには思われる。しかしながら敢えて仮借による通用説を提示した理由は何であろうか。これは王引之が形譌にたいして冷淡であつたわけではなく、³¹⁾ すでに見てきたごとく、古音における同音の判断があつたからに外ならない。しかし、それだけではなく、この詠／諄の仮借に関する考拠が、かれの他の仮借についての考拠と異なることに気づけば、王引之がこの考拠を積極的に展開したわけは、かれの考拠の基本的な考え方と深く関係したからであると理解されるのである。

王引之は『経義述聞』巻三「通説下」の「経文仮借」に、非常に多くの仮借に関する考拠の事例を挙げるが、そのパターンとしては大部分が「借(此)為(彼)、而解者誤以為(此之通行義)」である。これは、解釈者が、経書あるいは文献に記された(此)字を、それが仮借

した普通の(彼「本字」)に開くことができず、(此)字の通行義のまま
で文脈を枉げて解釈していたことを指摘したものである。つまり経義
の誤解や曲解について、それを訂す考拠なのである。王引之の仮借を
破字する根源は古音に基づくが、文脈上の疎通があるかないかが、決
定的な条件となる。つまり対象とする経書の文脈に徹底的に沈潜する
解釈の姿勢がもたらす結果である。ところが「墓門」の訛字に関して
は、「訛を借りて諄と為すも、しかるに解く者誤りて訛をもつて諄字と
為す(而解者以訛為諄字)」とあるように、従来の解釈者の誤りは、訛
を形諄字と誤っただけで、文脈あるいは経義にたいしてはなんらの影
響も与えず、他のほとんどの仮借にたいする考拠とは明かに質を異に
する。すなわち、訛を諄の仮借と判断して、訛をテキストから排除す
ることを回避する、まさに校勘的な要素の勝る考拠となっている。似
た事例は『周礼』の「純帛」と『儀礼』の「純衣」における「純」字
を「緇」に改める旧説の不備を訂す考拠に見るぐらいである。

この考拠で王引之は、訛／諄が仮借関係であることの確認と、訛を
誤字と見做すことによる改経の阻止とを果たしたのである。ところが、
王引之は、基本的には伝承されたテキストをそのまま受け入れる立場、
すなわち文献に書記されている字形を尊重する立場——訛字を排除し
ない——を取りつつ、一方ではテキストに書記された漢字の形体にた
いしてはほとんど重きを置かない——訛の背後に同音の本字である諄
を想定——といった、一見パラドキシカルな対応をしているのである。
この訛／諄をめぐる考拠の中に王引之の考拠の特質が潜むのである。
すなわち王引之は、経書の書記には仮借が普遍的に存在すると理解し
ていた。したがって規範的な立場から経書の表記の本来性を追求する
ことはしない。しかし、伝承されたテキストは、そのあるがままの仮
借用法の中に古音の情報を潜在させているので、後世的な規範によつ
てそれが破壊されることを回避するために、テキストの現状を保持し
ようとする。こうした認識が訛／諄の考拠の背景となっていたのであ
る。

はじめに、経書や古文獻の仮借表記についての見解を見てゆく。王
引之は「経文仮借」の前文で、「経典の古字で、字音が近くて通じ用い
るのは、なにも本字のない仮借とは限らないのである。往々本字が現
存しても、古い文獻では、その本字を用いず、同声の別の字を用いて
いる(至於經典古字、声近而通、則有不限於無字之仮借。往往本字見
存、而古本則不用本字、而用同声之字)」という。仮借として、本字の
ないいわゆる造字の仮借、および本字があるにもかかわらず同音を契
機にする同音借用あるいは同源通用などが、経書の表記に広く用いら
れていた実態を概括したのである。さらに『経義述聞』の中でたびた
び「古代は文字に仮借が多く、後世の学者はその読解を誤っている(古
字多仮借、後人失其読耳)」と、経書および古文獻の記述が多く仮借
によること、しかしながら後世の学者にはその実態を正しく把握しな
いための誤解が多いことを指摘するのである。すなわちある漢字の形
体は、現実の対象を指し示すために構成されることから、その形体は、
通常ある概念を本来的に担わされていると理解する。しかし現実の経
書における書記用法は、必ずしも規範的な使い方だけではなく、その
漢字の形体が固有する指示対象「本字」としての意味を排除し、単なる
表音機能のみに限定した用法「仮借」も一般的であったという、冷静な
現状認識が、王引之にはあったのである。仮借表記は、同音借用にせ
よ同源通用にせよ、その漢字の表音的機能を利用したものであるから、
所与の漢字が固有する意味や規範的な用法を追求することは、このば
あい表記の実態から外れており、直截に古音を背景とした音声的側面
から対応しなければ、いかに考証を重ねても、最初からの外的な考
拠になってしまったことになる。この点を端的に「いったい古代の
文字が通じ用いられた現象は、その音声に係っているのである。とこ
ろが現在の学者は、音声を追求めないで字形を追求めるだけであるか
ら、その説に誤りが多いのも当然である(夫古字通用、存乎声音。今
之学者、不求諸声而但求諸形、固宜其説之多謬也)」と指摘した。古代
においては仮借が広く行なわれていたとする、この認識は、古文獻の

考拠は音声的アプローチこそ正当なものであるとする考拠理念へと敷衍されることになる。すなわち、文献解釈の対象は、字形そのものの実体的な情報に依存するのではなく、その文字が担う古音に存すると見る。したがって、書体がどのように変化しようが、さらに文字が規範的に使用されていようがいまいが、それが書記された当時の古音の情報に変形を加えない限りは、文献解釈になんらの影響も与えないわけである。要するに、王引之の考拠にとって、本字／仮借字の区別は、音声的な情報つまり音声言語（古音）において経書や古文獻を究明するのであるから意味がないのである。これはまさに字形からの脱皮であり、王力によって「訓詁学上の革命」⁶⁸⁾とまでいわれたものである。つづいて、王引之の経書にたいする対応と本文批判のあり方を見る。それは王引之が、龔自珍に自らの経書にたいする姿勢を述懐した語に明快に示されている。⁶⁹⁾

私は言語学的な側面から経書の本文批判をした（吾用小学校経）が、字句を改訂したばあいも、しないばあいもあった。周以降は、書体が六七変もしたが、その間書記官吏が経書の伝承を掌ったので、この書記官吏の誤りについては、きっぱりと改訂した。五代の後蜀以降は、版木工が掌ったので、版木工の誤りも、改訂した。唐・宋・明の学者は、音韻・文字を理解しないまま改経に及び、正しきを誤りとすることもあった。これは妄改なので、その改められた箇所は改訂した。ところで、周末漢初は、経師の手元には書物がなかったものであり、また異体字の存在も広範囲に及んでいた（経師無竹帛、異字博矣）ことから、ある一字を選択して正しいものとの判断ができないので、改訂しなかった。仮借の法は、その起源や運用は古く、本字については八割は究明しうるが、二割は困難で、完全に本字を究明して仮借字を改めつくすということになれば、本文校勘の聖人の役割となる（必求本字以改仮借字、則考文之聖之任也）ので、改訂しなかった。書記官吏や版木工の

誤りで、疑わしく、そしてそれが確かだと思われるも、文献上証拠がなければ、後学の議論を増すことを配慮して、改訂しなかった。

この発言から、まず理解できることは、経書の成立とは関わらない、後世的な伝承上のトラブルについては、字句の改訂を積極的に行い原状回復を徹底的に図ったことである。すなわち、写本時代における単純な転写の誤りや書体の変遷に伴う誤解や誤記、整版印刷成立以後の版木工による整版制作過程や無知による誤り、さらに古音にたいする歴史的視点を欠いていた唐以後の学者の主観的改経については、進んで改訂したのである。ところが、混沌たる経書の成立事情や古音の通転範囲においてかなり自由に運用されていたと想像される古代の書記方法に淵源する、証明することの困難な問題については、一転して慎重な姿勢を取るようになる。すなわち、歴史的に周末漢初は、秦火を念頭に置いてか、規範となるべき経書が存在しなかったと考え、また戦国各国の書体が十分に統一されないまま漢初に及び、異体字の存在がはなはだしかったと見る。今日の出土文献の夥しい異文の存在もすでにこの状況の中に包括されているといえよう。こうした事態から派生した、各経書に異系統の別本が多く存在する事実を前に、果たして本来の経書の形を示す原本ともいふべきテキストに遡上できるのか否か、あるいは仮借用法が一般的であったかどうか、戦国各国の独自の文化ごとに産出されていた異体字が当時広く存在した事実の前で、文字を規範的に書き写すという考え方が果たして当時にあつて、受け入れられていた観念であつたか否かについては、判断を保留せざるをえない。したがってこの点に抵触する問題に関しては、非常に慎重な立場を貫いた。すなわち系統を異にするテキストの異字あるいは異読については、一概に規範的に――すでにこの考え方が後世的な観念に侵食されている――対応することが、古代の書記現実を否定する行為であり、かつこうした観点から文献を本来あつたであろう正しい

形にすることは不可能なことであることを認識しているのである。仮借が普遍的であった古代の書記事情を考慮したばあい、經書の記述・表記に関わる確定し難き事情に逢着することから、仮借表記にたいして、それが指示する意味を表記するために作られた本字を一応想定することはするが、所与の表記それ自体を本字に変えることはしないのである。つまりテキストが、その成立時においていかに書記されていなかという、その本来性については追求を放棄し、意味の了解をもつて解釈を完結させるのである。「考文之聖之任」としてテキストの本来性の追求を自らに課することを避けた姿勢は、經書の表記現実にたいして手を加えることを差し控える慎重さの表明であった。

ところで、仮借が、古文獻の書記方法として普遍的であったとの認識は、古文獻の現状を後世的な判断をもつて改めることを回避する姿勢と表裏する。これが王引之の考拠を貫く重要な観点であった。これは、ただやみくもに經書の現況をそのまま保存することに価値を置く抱残守缺ではなく、經書伝承に関する歴史的視点と文献表記の本質にたいする理解のうえに立つものであり、言語における歴史性の反映である古音についての認識が根柢に存するのである。はつきりした形謬のばあいは表記の訂正を当然のことながら行うが、それ以外は極力保留するのは、仮借された時点における古音の情報を損なわず固定するために、仮借字をそのまま受け入れる立場を取るからである。したがって、古音とその通転の原理に正確に通じないことが、文字あるいはテキスト改変の原因の一つになるのである。たとえば、『經義述聞』巻九に、『周礼』哲族氏の「哲」について、王念孫の考拠がある。鄭司農注「哲讀為𪛗」、鄭玄注「哲古字從石折声」とあるのを承けて、段玉裁は『周礼漢讀考』で、諧声系列に拠り、析・適は古音十六部（入声はk韻尾）であるが、折は十五部（入声はt韻尾）であるので、析声符の「哲」字でなければならぬと断じ、『説文』でも哲を哲に訂正する。これにたいして王念孫は、古文獻を遍く記述的に分析する考古の立場から、折（祭部の入声）が、𪛗（支部の入声）と古音が同じ「提」で読まれる例

などを挙げ、段玉裁が古声の通転に暗いまま「哲」字を臆造したと批判する。また段注が「媿」字項での解説で、折は提の形謬としたのを、王念孫は「古音における通転に理解がない（此不明於古声之転也）」からと批判する。なぜなら、右傍が似ないので、声近という条件がなければ、提が折に誤った過程を合理的に説明できないからである。そして段玉裁の古文獻にたいする姿勢を「いわゆる旧来の經文に依拠して無理なこじつけはしない（所謂遵循旧文而不穿鑿）」ことに外れると指摘したのである。まさにこの指摘は、王引之の考拠の姿勢と重なるのである。そして古音の情報をそのまま包摂する旧来のテキストを、後世の音韻規範による破壊から守ろうとする王引之の考拠のあり方が、「經文仮借」の中でも特異な訊／詮の考拠を支えたのである。

王引之は、經書の表記それ自体に拘束されることなく、表記を突き抜けた古音を指向するが、經書の表記の保持には積極的であった。それは、後世的規範意識による改訂は妄改に連なる危険があるとの的確な判断が働くからであり、その判断は自らが言い当てられる検証可能な限度、すなわち「小学」なる文字・音韻・訓詁の言語学的な範囲に限定して考拠の作業をする立場（用小学校經）の堅持に由来するものである。また經書や古文獻の表音機能による仮借表記の実態について把握した王引之は、その表記に付託された意味は、まさにその表記が提示する音声に支えられていること、そしてそれは当然のことながら古音によっていることを明確に自覚し、漢字の形体の呪縛を克服して、音声としての古代の言葉聴こうとしたのである。もちろん文字として書記されたテキストを經書解釈の差し当たった対象とはするが、その本質は、書記されたテキストに即しつつも、それを突き抜けて古代の音声言語を解釈の直接的な対象とすべきであると意識するようになっていたのである。このように言葉と音声の側から表記を見るとき、本字／仮借字という書記形式は、經文解釈にならんと関与しないことに気づかされるのであった。つまり古音に基づく音声言語こそが本来の經書の言葉であるとの視点からは、本字／仮借字いずれにせよ

書記手段としては等価なのである。

漢字の形体を超えて、音声言語を直接聞き取ろうとする姿勢は、今日から見れば当然過ぎるくらいのものであるが、清代という時代・状況の中で、それを樹立したことについては、改めて王力の「訓詁学上の革命」とする評価を思い出すべきであろう。こうした漢字を実体的ではなく、あくまでも音声レヴェルで見る認識の確立が、その視野の広がりとして虚字分析への視角ともなり、『經典釈詞』に結実していったことも容易に推測されるのである。

《注》

- (1) 目安のためにカールグレンの推定した音価を示す。 *Glosses on the Book of Odes*, Museum of Far Eastern Antiquities, Stockholm 1964, p. 223 に拠る。
- (2) 吳承志は『経籍旧音弁証』中文出版社、二七五、四四頁で通仮を認め、黄焯は『經典釈文彙校』中華書局、一九八、六三頁で音・義ともに通じることをいう。王力は『詩経韵説』上海古籍出版社、一九〇、四・三五頁で形譌をいう。
- (3) 『文物』八期、一九六、二期、一九六、八期、一九四に報告が載る。
- (4) 『文物』八期、一九六、三三頁。
- (5) 『中華文史論叢』一、上海古籍出版社、一九六、三頁。
- (6) 『文物』八期、一九六、一五・一七頁。
- (7) 音韻学叢書『音学五書』広文書局、民五。
- (8) 国学基本叢書『十駕齋養新録』一、台湾商務印書館、民五、一五・一六頁。
- (9) 『段玉裁遺書』大化書局、民六、四五頁。
- (10) 『説文解字注』上海古籍出版社、一九八、八五頁。
- (11) 国学基本叢書『潜研堂文集』三三、台湾商務印書館、民五、五〇一頁。曾孫慶曾校注『錢辛楣先生年譜』は乾隆三五年(一七九〇)に比定する。乾隆三二年に段玉裁は『詩経韵譜』『群経韵譜』を一応完成。三四年に若い邵晋涵の協力を得て注釈を付け、翌三五年に錢大昕は序文も書いている。四〇年に増補し『六書音均表』と改名。
- (12) 『釈詁』卷四上。江蘇古籍出版社、一九八、二七頁。
- (13) 卷五。江蘇古籍出版社、一九八、一六九頁。
- (14) 小川環樹「詩経異文の音韻的特質」、『中国語学研究』創文社、一九七、三頁に「後世の音に合う様に文選が書き改められたという如きは殆どない。文選は比較的忠実に梁以前の押韻を保存したと言いうことができるのである」と。
- (15) 引用の持つ文献学上の価値に関しては、俞樾『古書疑義舉例』卷三「古人引書每有増減例」、『古書疑義舉例五種』中華書局、一九八、四八頁に「蓋古人引書、原不必規規然求合也」とあり、また朱一新『無邪堂答問』世界書局、民三、卷三、三丁に「国朝人於校勘之学最精、而亦往往喜援他書以改本文。不知古人同述一事、同引一書、字句多有異同、非如今之校勘家一字不敢竄易也。今人動以此律彼、專輒改訂、使古書皆失真面目」と指摘する。
- (16) 『皇清經解統編』六、芸文印書館、民四、四三三頁。
- (17) 皮肉なことに王引之自身も同じ批判を受けることを免れなかった。『無邪堂答問』卷二、三四丁に「王文肅文簡之治經亦然、其精審無匹、……顧往往捃類書以改本書、則通人之蔽」とある。
- (18) 羅振玉に依るコロタイプ版と楊守敬の古逸叢書版とを併収した『原本玉篇殘卷』中華書局、一九五、三七八頁に見える。周祖謨は、本書の郭璞注に「相問詳也」とあることから、『爾雅校箋』江蘇教育出版社、一九四、三四頁で「可知顧氏所拠《爾雅》郭注本「詁」亦作「詳」と、「詳、言也」に作る『爾雅』の存在の蓋然性を指摘する。王引之もすでに現行『爾雅』「詁、言也」にたいし、大広益会『玉篇』・「広韻」が「詳、言也」に作ることから「爾雅別本有作詳者」とその存在を推定していた。
- (19) 国学集要、羅振玉輯本『高郵王氏遺書』文海出版社、三三頁。
- (20) 陳新雄「古音發微」文史哲出版社、民六、三四頁の記載による。
- (21) 王国維『觀堂集林』卷八「高郵王懷祖先生訓詁音韻書稿叙録」、『海寧王靜安先生遺書』台湾商務印書館、民四、三〇三頁によれば、王念孫は、現在『経義述聞』の二十一分部表に一部見られる諧声表をすべて完成させていたようである。王国維は『補高郵王氏諧声譜』を作り、「凡」を真部に属させ、詁に傍線を付す(三三頁)。これがなにを意味するか、またこの帰属が果たして王念孫の意に従うものであるかも不明である。
- (22) 董同龢「上古音韵表稿」台聯風出版社、民六、五頁に陰類と韻尾

陽類との対転が顕著であると認め、陸志韋『古音說略』学生書局、民六、三八頁に陰陽対転を論じて「n通陰声の現象可見是很普遍的」という。

- (23) 『諸声補逸』卷一、『叢書集成新編』三七、新文豊出版、民四、四六頁に、異部間の音通を分析するうえで「説文」に記録された重文が重要な資料となるとして「凡説文重文之字、甚可宝貴。或異形而声近、或異部而諸声、可以知古人造字通作之始、可以知古音有分有合之故、可以知六書假借轉注之理、可以知古人訓詁有声而後有義之由。後世音転、陸韻配合、肇基于此。謂古無合音者、非好学深思、心知其意者也」という。

- (24) (25) 同右書四二頁、四六頁の「自序」。

- (26) 同右書四三頁。ただし王念孫『広雅疏証』卷六、一三頁に「凡字從包声者、多転入職・徳・緝・合諸韻。其同位字而相転者、包犧之為伏犧、抱鶏之為伏鶏、是也。亦有異位而相転者……苞・合声相近……鮑・莫声相近、故鮑魚転為莫魚、猶之鮑・疑声相近、故軫鮑之鮑読為疑也」とあり、宋保とは異なり、韻部についてではなく声紐について規定し、同位は双声を指すようである。

- (27) 王国維『観堂集林』巻七によれば、漢代、戦国の六国で用いられた字体をいうと。王念孫『書錢氏答問説地字音後』、『高郵王氏遺書』五二頁に「説文」全書の例を検討したうえで、小篆と古文が異なるときは古文を記載するが、古文の記載がないときは、古文がないのではなく小篆と同じ形のためという。

- (28) 『諸声補逸』、四三頁。

- (29) 「与江晋三書」、『高郵王氏遺書』五九、九頁。

- (30) 嚴学窘「周秦古音研究的進程和展望」、《中華文史論叢》増刊「語言文字研究專輯」下、上海古籍出版社、一九八、一〇三頁。

- (31) 王国維「爾雅草木虫魚鳥獸釈例自序」、《海寧王静安先生遺書》二六六頁に、段・王はその古音分部による疊韻の訓詁では行き詰まることもあり、実際には双声に依拠した訓詁も多いという。訊／詮はカールグレンの推定音価からも自明のごとく双声であるが、果たして王念孫・引之の「同声」の認定にそれが考慮されていたかは不明である。林義光『詩経通解』中文出版社、一九七、二頁は双声・疊韻を認めながら形譌説を支持する。
- (32) 『経義述聞』卷三三「通説下」に經典の転写上の誤りである「形譌」を分析して「經典之字、往往形近而譌。仍之則義不可通、改之則怡然理

順」と規定し、結論として形譌を判断する条件を掲げて「尋文究理、皆各有本字。不通篆隸之体、不可得而更正也」と、篆書や隸書を初めとして古文・或体・草書など字体全般に通じることを絶対的な条件とする。また『読書雜志』一之四には『逸周書』「武王評周公維道以為宝作宝典」の評を詮の形譌とする王引之の考拠があり、「評字、義不可通。評当為詮。爾雅、訊、告也。釈文、訊作詮、音粹。……隸書卒字、或作卒、与平相似、故詮譌作評」と論じる。

- (33) これは『経義述聞』巻十五で、『礼記』学記「多其訊言」の「訊」を「問」義とする旧説を覆し、「告」義の解釈を提示するための前提ともなった。

- (34) 四四頁。また三六頁にも同様の指摘がある。

- (35) 六頁。六頁・三頁にも見える。表音表記が徹底した双声疊韻の連綿語についても、三六頁・三頁で、また『広雅疏証』二九頁・一六頁で同様に指摘している。

- (36) 『中国語言学史』山西人民出版社、一九八、一五頁。

- (37) 「工部尚書高郵王文簡公墓表銘」、王佩誥校『龔自珍全集』中華書局香港分局、一九四、一四八頁。